

現在ヨーロッパにあることが知られている三つの日本のお札のコレクションは、いずれも公共の博物館、施設に属する。これ以外に博物館や図書館に散在している紙のお札があるにしても、少数であったり一貫性が欠けているために、「コレクション」とは呼べない。そもそもヨーロッパに渡來したお札の歴史というのはこれから書かれるべき一つの研究対象だと言える。それは少なくとも1727年のケンペルの『日本誌』¹にまで遡る。

以下ではこの三つのコレクションを、収集家の名前で参照したいと思う（そうしたからといって受入れ機関の役割を軽視したことにはならないだろう）。年代順にいった一番古いのはB. H. チェンバレンが収集したもので、これは当初からオックスフォード大学のピット・リバーズ博物館に保管されている。次がアンドレ・ルロワ=グルアン、最後がベルナルド・フランクのものだが、この二つはそれぞれ最近、ジュネーブ市の民族学博物館とコレージュ・ド・フランスの日本学高等研究所に遺贈された。

ごく一般的な観点から見ると、この三つのコレクションには似通ったところもあれば非常に違ったところもある。数の上では順に、約400、900²、1000ほどだが、この量的な差は、コレクションの一貫性、内容面での差に比べれば重要ではない。本質的な違いは、収集方法の違いに由来する内容面にある。最初の二つのコレクションは、ヨーロッパの民族学博物館の要請に応じて、あるいはその資金援助のもとに、数年間にわたって多少いきあたりばつりに収集されたものである。これに対してベルナルド・フランク・コレクションは、彼が一定の方法にしたがって、一生をかけて自費で作上げたものだ。お札によって日本大衆のパンテオンをできるだけ完全な形で表現するという統一的な視点にしたがって収集されているのは、彼のコレクションだけで、そのためにフランク・コレクションには、特定の意図なしに集められた残り二つのコレクションにはない、内的な一貫性が見い出される。そこには作者独自の視点が現れていて、その意味でひとつの作品をなしていると言える。

この三つのコレクションが日本国外、西洋にあるということには、何の不思議もない。これほど物的価値のないものに関心を寄せて収集し、それを民俗学的資料と見なすということは、学問的視点の存在を意味するが、日本の学界はごく最近までお守りの類にこういった学問的関心を示してこなかった。もっとも国家神道の側、特に内務省神社局の中では、お札が国家イデオロギー普及の手段としてきわめて具体的な役割をはたしうることが、すでに1930年代に認識されていた³。

¹ フランス語に1729年に訳されている彼の『日本誌』表XXXVIIIは、三十三観音のお姿の実物大（455 x 310 mm）の忠実な複製。出版者Hans Sloaneが所有している原版はしかし、模写を行ったScheuchzer自身の言によれば、中国のもの。これとは別に、ケンペル自身が日本家屋の扉や柱に貼付けられているお守りを見て書いたデッサンによる牛頭天王（元三大師のまちがいではないか？）の版画もある（表XXI, 図10）。この種のものはいくつかともキルヒャー（Athanasius Kircher）の*China monumentis* (1657)まで遡ることができる。

² ルロワ=グルアンのコレクションとして、ジュネーブの民族学博物館とパリの人類学博物館に保存されているものを加えた数。

³ 言うまでもなく、1930年代に日本中の各家庭に配布された伊勢大麻のことを指す。安津素彦と梅田義彦の『神道辞典』

この態度の違いは、お札が日本人に語りかけるものと西洋の収集家に語りかけるものが非常に異なることに起因すると思われる。日本人にとってお札はごく最近まで、日常生活から切り離せない生きた要素、風習、ささいな信仰・迷信であった。あるいは呪術的法則に支配された無意識の世界、不合理な世界に属するものだった。日本でもヨーロッパでも、消滅しつつあるということを認識して初めて、お札を違った目で見えるようになる。すなわち、何よりもまずある環境と時代を証言する物的資料としてお札をとらえるという、客観的な観点である。すでに歴史的になった資料、国の文化財の一部としてのお札の収集が始まったのは、ここわずか数年のことである⁴。

ここで話題にしている三人の西洋の収集家にとっては、お札はまったく異なる魅力を持ったものだった。当時オックスフォード大学のピット・リバーズ博物館の館長だった人類学者 Edward B. タイラー (1832 - 1917) は、日常的に使われ呪術宗教的な性格をもったこのオブジェを前にして熱狂したようだ。タイラーにとってお札は、彼が原始的世界の特徴とし、また同博物館の展示テーマでもあったアニミズムの世界観を反映するものだった。また、エキゾチックで神秘的な文字、図像学の面から見てきわめて豊富な内容を持った宗教的イメージにも、魅了されたに違いない。いずれにしろ収集は、当時東京帝国大学の日本語学と博言学の教授であったチェンバレン (1850 - 1935) の仲介によるものだった。同時にチェンバレンはタイラーに、関連した伝説、民間信仰についての情報を伝えている。この博識な学者はしかし、オックスフォードの博物館にお札を送りながらも⁵、彼が「民衆の迷信・盲信の具象物」(この形容は、彼の著作『日本事物誌』の「お札とお守り」と題された章にあるもの⁶)と呼ぶお札に特別な関心を寄せていたようには見えない。いずれにしろ彼の文通を見るかぎり、チェンバレン自身がお札の購入に向いたと思わせる箇所は皆無である。一方、コレクションのかなりの部分がラフカディオ・ハーンから来ているということを示す証拠は豊富に存在する。ハーンは人々がお札について知っていることを探し求めて、熱心に寺社を訪ねており、ハーン自身が語るところによれば、彼はこうして集めた情報にさらに自分のコメントを添えて、お札で一杯の箱をいくつもチェンバレンに送り、それらすべてがオックスフォードの博物館長のところに届くようにしている⁷。ハーンの収集に

(1968)によると1943年、西は台湾、東はハワイに至る日本大帝国の住民の96%に合計1700万以上の大麻が配布されたとされる(「神宮大麻」の項参照)。さまざまな形のお札についての最初の研究を行った者の一人、矢部善三と、その著作(1934)の序文を書いている宮地直一は、いずれも神道の専門家であると同時にお札の収集者であった。矢部によれば、神道研究者でもあれば神主でもある宮地は、天神に関係するものだけでも優に千を越えるお札を収集したとされる(矢部1934, 7)。

⁴ 先の注で触れたコレクションは、早くも1930年代に収集されたとはいえ、純粋に学問的な観点から資料として収集されたものとは言えないだろう(前掲書1934における著者矢部の前書きを参照)。

⁵ 「1888年から1908年までチェンバレンは博物館のために日用品、楽器、瓶、さらには数百点の宗教的な物品を購入した。この最後の種類のものには、「牛の安全のためのお守り」と琉球諸島のふたつの大きな骨壺が含まれる。骨壺の一つは幅広くこった模様が施された裕福な人のためのもので、もうひとつの貧しい人のための単純な上菓なしの壺と対照をなしている。チェンバレンはまた、日本北方の島、北海道で宣教に携わっているJ. Rousseau に依頼して、同地にすむ少数民族アイヌからもコレクションを収集した。」

(ピット・リバーズ博物館のWebサイト、www.prm.ox.ac.uk/japanからの引用)。

⁶ Things Japanese - being notes on various subjects connected with Japan, for the use of travellers and others. 5th ed. rev. London: John Murray/ Kelly & Walsh. Pp. 86-87. 邦訳、『日本事物誌』(平凡社東洋文庫131, 147)

⁷ Chamberlain, Basil Hall, ...encore est vive la souris (Pensées et Réflexions). Lausanne: Payot, 1933. 参照。楠屋1986と坂出2004に引用されているもの。

よるものではないコレクションの多くは、チェンバレンがイギリスに送った他の物品同様、彼が古物商に頼んで入手したものと思われる。当時の日本ではお札を好んだり、それに興味を寄せて収集する人がいなかったため、古物商や古道具屋に注文するというのが唯一の収集方法だった。そもそも当時の民族博物館の所藏品、特にピット・リバーズ博物館のそれは、こういった方法で出来上がったものだ。なぜなら博物館の創設者も初代館長も、現場の研究者ではなく、現場にいる者に頼んで古美術商での競売を通じてコレクションを作り上げるのが通常だったからである。ピット・リバーズ博物館の台帳 (accession book) によれば、チェンバレンから 1320 の物品が送られてきており、金額は不明だが、その大部分に対してチェンバレンに代金が支払われている。

なるほどチェンバレンは第三者を通じてお札を集め、彼にとってお札は庶民の迷信を伝える安物の「紙切れ」に過ぎなかったが、それでも当時すでに、お札の資料としての価値に気づいていたように思われる。1882 年に『古事記』を翻訳している彼は、お札に書かれた字句と神の名前を正しく理解できる、最適の研究者だった。

フランスの民族学者アンドレ・ルロワ=グルアン (1911 - 1986) による二つ目のコレクションは、彼が外務省の留学生として京都を中心に日本に滞在した 1937 年から 1939 年のわずか二年間に収集されたものだが、彼の文通、ノート、原稿、その他当時に書かれた文書⁸から、収集方法に関するいくつかの情報が得られる。

まず、ルロワ=グルアン・コレクションとチェンバレン・コレクションがかなり類似していることに驚かされる。二人とも、滞日中にかかなりの旅行をしている。チェンバレンは「日本中を四方八方に歩き回った」と述べているし、ルロワ=グルアンも小刻みにあちこち寄り道しながら、8000 キロメートルに渡る日本列島縦断を行っている。二人ともその過程で、現地で物品を購入する機会があったと思われるが、それは本人たちが語っているように、主として古物商における入手だった。ルロワ=グルアンは次のように書いている：「お札やその原版が欲しければ、古物商に一言いいさえすれば、雪崩れのようにどっさりだしてくれる⁹」。彼の購入も、当時ジャック・リベが人類学博物館に改装しつつあった、パリ、トロカデロの民族学博物館という一機関のためであった。

彼と日本と中国が専門の美術史家ジャン・ビュオの間の文通は、当時九条山に住んでいた彼が、京都でどのように資料を購入していたか、その様子を細かく伝えていて貴重である。中でもトロカデロの博物館が、琉球諸島からアイヌまでを含む日本文明の民俗学資料収集のためにおよそ 8000 フラン (1937 - 38 年当時の日本円で 800 円ほど¹⁰) を彼に送っているのが分かる。彼は 700 の収集品を携えて 1939 年にパリに帰ってきたが¹¹、その約 10 分の 1 がお札だった。しかし当時北アジアにおける動物の図像学を研究していたルロワ=グルアンは、個人的にもこの

⁸ 全体がタイムリーに、以下のタイトルで出版された。André Leroi-Gourhan : *Pages oubliées sur le Japon - recueil posthume établi par Jean-François Fesbre*. Grenoble : Million, 2004.

⁹ 同上 63 ページ。

¹⁰ 上掲書の編者によれば、1kgの米が約 20 銭、労働者の月給が約 35 円だった (同上 25 ページ)

「大衆的な図画」に興味を抱いていた。

彼はこの研究者の立場から、自分のために豊富なコレクションを作り上げ、1938 年末にはギメ美術館に 300 点ほどのお札の買い上げを持ちかけたほどである。このコレクションは、彼自身の言葉によれば、「大部分は古いものからなる仏教と神道の寺社における神をかたどった木版画（巡礼者に配布される紙片）で、中には西国三十三カ所と四国八十八カ所の完璧なシリーズ」が含むまれていた。

ルロワ=グルアンのノートは、彼が熱心に集めた品々の値段を明白に語っている。たとえば 1938 年のこととして次のように記している：「通常の紙片（お札）は 10 サンチーム、印刷用の原版が 5 フランから 10 フラン。これがのみの市における通常の値段で、私もだいたいこの辺の値段で購入する¹²」。チェンバレンは、この種のことにあまり饒舌ではなく、せいぜい「はした金」と言及するだけである。「失われていることが多い印刷されたものより、原版のほうが見つけるのが簡単だ」というルロワ=グルアンの指摘は、お札に対する「非公式」な信仰が、戦前のこの時期においてすでにすたれている様子を雄弁に物語っている。

以上二人の学者が日本のお札に注ぐ視線の違いは、彼らの知的関心の違いからも来るのではないだろうか。日本語学、博言学、古典文学と神話の専門家であるチェンバレンには、どちらかといえば書かれた資料を評価する傾向があり、北アジアという広大な地域における図像学が専門だったルロワ=グルアンは、当然ながら図画を重視した。

しかし当然ながら二人とも、二人が特別の関心を寄せていた宗教現象の分野にお札を分類した。もっとも日本をよく知る学者の一人として評判のあったチェンバレンは、お札が下級階層に普及している低級な迷信の対象であるとしか考えていなかった。二人ともお札を、仏教か神道という、由来する宗教に応じて分類した。ルロワ=グルアンに至っては、仏教に由来するものをお札、神道のものをお守りと名付けているほどである¹³。図画と図像に興味のあるこの民族学者はお札を、大津絵、絵馬、マンダラ、掛け物、宝船や福神が描かれている紙片、さらには多彩色の凧とまでならべて、「大衆の図画」の中に分類した。また彼は、人間の形をした神よりは、動物の描かれ方に興味があったので、特に絵馬に注目した。こうして彼の遺著である『日本についての忘れられたページ』の中には「日本における宗教美術の大衆形態」と題された重要な原稿があって、90 ページに渡って絵馬とおもちゃの類だけが論じられている。

チェンバレンもルロワ=グルアンもお札が巡礼に関係していること¹⁴、お札が訪ねた聖地のお土産として大きな力を持っていることを、認識していた。そもそも古物商自身が主として

¹¹ 同上 85 ページ

¹² 当時の換算レートによれば、これは紙のお札が 1 枚 1 銭、木の原版が 20 銭から 1 円ということに相当する。この原版に関して言えば、大部分は古物商から買い上げたものだろうが、当時寺社の境内で定期的に行われていた市場で購入した可能性もある（たとえば東寺や北野天満宮などの市）。

¹³ 現在認められている、より適切な定義に関しては岡田他の「日本の護符文化について」、『神道文化』14号、2003）、p. 12-41. 参照。

¹⁴ チェンバレンの見下した態度は、彼の以下の言葉に表れている：「こういったお札を得るとというのが、相変わらず聖なる山や神社への巡礼者の目的のひとつである。こういった習慣は、20 世紀の欧米の観念にまだ完全に浸っていない社会階層において依然として人気がある」（注 6 で引用した原文の 85 ページ。翻訳は坂出論文の下、145 ページ）。

巡礼者からお札を入手したと思われる。巡礼が戦前まで非常に人気があったことを考えると、先のルロワ=グルアンからの引用にあったような西国三十三カ所と四国八十八カ所の完璧なシリーズ」をそろえることさえ、さほど難しくなかったと思われる。巡礼地を完全に回って、お札の完璧なコレクションを作ること、そのご利益（りやく）をより効果的にするということが、巡礼者の大きな関心事だったからである¹⁵。

ベルナール・フランクは、ルロワ=グルアンからおおよそ 20 年後、1954 年から収集を始める。すでに述べたようにルロワ=グルアンは 2 年足らず、チェンバレンは 16 年を費やしているが、ベルナール・フランクは 40 年、ほとんど一生を絶えずコレクションの完成に費やした。博物館のために収集購入された先の二つのコレクションとは対照的に、フランク・コレクションは、すでに述べたように彼が個人的に自費で作上げた学問的作品である。またフランクは、先行する二つのコレクションの存在を当初知らなかった。

フランクが古美術商や古物商の店頭でばらばらのお札を見つけることがあったにしても、それは古いお札の場合に限った例外的なことだった。彼は、たいていの場合、前もって所望のものを知った上で、彼自身お札入手のために現地まで赴いた。この文字通りの回国巡礼についてフランクは、1988 年、自ら次のように語っている。「日本に滞在中 - 総べればほぼ 8 年のあいだ- 私は数え切れないほどの寺、社を回った。多分二千は越えている。その多くは仏教寺院であったがもちろん神社も含まれていた」。少し先では次のように述べている。「そして日本列島のほとんどの県に行ったが、私の調査がどこでも均等であったとは言い難い。ある地方では詳しく、他地方では浅かったことを認めざるを得ない」。

収集方法の一貫性とその執拗さに加えて、フランクはお札という宗教現象に対して、内部構造と輪郭のはっきりした全体像を描いていた。それは、彼がお札の中でもある一定の種類のものに研究を集中していたためである。彼の言葉によれば、「この千枚余りの中、八百枚程が尊像の姿形を表したお札で、当然のことながら、それが私の最も興味を引くお札もまた重要な情報を呈示していることは言うまでもない」。

フランクにとってお札は、単なる民俗学資料ではなく、彼をあれほどまでに魅了した日本の宗教世界の中心をなす要素だった。彼は、彼が私淑したラフカディオ・ハーン同様、日本の民間の信仰と崇拝の内容に対してきわめて個人的な愛着の念を抱いていたが、図画によるお札はそういった日本の宗教世界を簡潔に、かつ美しく示すものだったのがある¹⁶。

仏像図像学の専門家であった彼にとってお札は、彼自身の表現によれば、「仏教パルテオンがどのような形で日本の土地に、習慣に、日本人の感覚の中に根を降ろしているかを、いかにお札が証明しているかということである」。コレクションの最終目的は、日本人の想像力の中、いたるところに住んでいる多元的な神様を、ひとつひとつの図画によって再現すること、全国中の数千の神社仏閣にまつられている神々の巨大なパルテオンをパズルのように組上げることだ

¹⁵ 物的対象を収集するものにとって、コレクションの最高で不思議な価値は、その完全性の中にある。

¹⁶ 「絵札のお札- 日本の寺の版画：体系化されたコーパスの試み」 第五回日仏シンポジウムにおける発表論文の原稿（1988）、5 ページ。日本語版（平河出版、1991 年 10 ページ）には掲載されていない箇所。

った。フランクは、いろいろな菩薩、神性が変身した形を尋ねて日本中を歩き回ること、日本大衆の宗教生活の地図を作り、その生き生きとした姿を描くことに成功した。なるほど、密教の瞑想手段として、あるいはある特定の寺社における神の階層構造を示すものとして、マンダラの形による神の表現は数多く存在するし、彫像の形をとったマンダラによる三次元の表象さえある。しかし、日本に広がるパンテオン全体をお札を使って表現しようというアイデアは、ベルナール・フランクのまったく個人的な創意だと言えるだろう。

さらに彼のおかげで、日本の学界がこの宗教現象に目を向けるようになり、その研究が刺激された。これは、戦前の矢部善三の先駆的な仕事が、その真剣な学問的姿勢と扱われている領域の広大さにもかかわらず、戦後には影響力を失い、果たし終えなかったことである。

参考文献

- CHAMBERLAIN, Basil Hall, ... *encore est vive la souris* (Pensées et Réflexions).
Lausanne : Payot, 1933
- KUSUYA Shigetoshi 楠家重敏 『ネズミはまだ生きている』 —チェンバレンの伝記—、東京、雄松堂、1986.
- OKADA Y. *et al.* 「日本の護符文化について」、『神道文化』14号、2003, pp. 12-41.
- FRANK, Bernard, "E-fuda no o-fuda – Images gravées des temples du Japan : Un essai de corpus raisonnée. Ms. de la communication faite au 5^e Colloque franco-japonais, 1988, 19 p.
- FRANK, Bernard 「絵札のお札」 in suivant : pp. 3-25.
- SAKAI Tadao, FUKUI Fumimasa, YAMADA Toshiaki éds 『日本・中国の宗教文化の研究』、東京、平河出版、1991.
- ベルナール・フランク
「〔お札〕考」、『日本仏教曼荼羅』仏蘭久淳子訳。東京、藤原書店、2002。303-390ページ。
- SAKADE Yoshinobu 坂出祥伸、
「明治のおふだと、あるイギリス人 上・下」『大法輪』9、10、2004、pp. 42-47
上; pp. 140-148 下.
- YABE Zenzō, *Jinsatsu-kō. Tōkyō* : Shirōtoshya, 1934. 矢部善三著 『神札考』東京：素
人社，昭和九年。